
大乱闘スマッシュブラザーズX ~ヘルパー軍の逆襲~

ピノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘スマッシュブラザーズX ～ヘルパー軍の逆襲～

【Nコード】

N3241Z

【作者名】

ピノ

【あらすじ】

ここはスマッシュブラザーズの世界。

今日もファイター達は大乱闘。

そしてそのためのアイテムを作るマスターハンドだったが、作っていたアシストフィギュアの中身のキャラクターがファイターになりたいが為にフィギュアにならず逃げ出してしまっ！！

この小説は一作目に比べると読みやすいです!!
沢山のコメントがあると嬉しいです>・<

因みに亜空の使者や破創の化身との関連性は無いです。
まったく別のお話です。

では是非読んでください!!お願いします^^

序章 く闘争心の逃走心く（前書き）

時間が許すならお付き合い下さると嬉しいですよ^^

序章 闘争心の逃走心

ここは創造神マスターハンドが支配する世界。
皆も良く知る『スマッシュブラザーズ』の世界だ。

選ばれたファイター達が乱闘を繰り広げ、己の強さを磨き、競い合う世界だ。

その世界で今、ある者達によって事件が起きようとしていた・・・。

マスターハンド

「ふう・・・、これで今日の乱闘はすべて終わったな。明日の乱闘に備えてアイテムの補充をして置くとするか・・・。」

大乱闘スマッシュブラザーズの世界ではアイテムの補充はマスターハンドの仕事だ。マスターハンドはただ自分の仕事をしただけだった筈だ……。

Mハンド

「今回はアシストフィギュアの消耗が激しいな。重点的に補充しよう。」

そしてMハンドはアシストフィギュアを沢山作ることにした。

アシストフィギュアの作り方は少し複雑だ。

- ? 中に入るキャラクターを作り上げる
- ? 作り上げたキャラクターにアイテムとしての意識を持たせる
- ? フィギュアに封印する
- ? 中のキャラクターが弱らないように不思議な力をこめる
- ? 中身を見えないように加工して出来上がり。

Mハンドはいつもの工程通りに、まずのアシストキャラクターを作り上げた。

作り上げたキャラクターは以下の通りだ。

・アンドルフ

- ・エキサイトバイク
- ・カット&アナ
- ・くるり&ラセンダー8
- ・サキ・アマミヤ
- ・サムライ・ゴロー
- ・ジェフ
- ・ジュゲム
- ・スタフィー
- ・チンクル
- ・デビル
- ・ドクターライト
- ・ナツクルジョー
- ・ラブラドル・レトリバー
- ・ハンマーブロス
- ・ヘリリン
- ・メトロイド
- ・リセットさん
- ・リトルマツク
- ・リン
- ・ワルイージ
- ・レイMk?
- ・ロビン
- ・センシャ&ホヘイ
- ・バーバラ
- ・シャドウ
- ・サイボーグ忍者

Mハンド

「ふう、出来上がったな。」

いくら無限の力を持つMハンドでも大量のキャラを作るのは少しは
疲れるようだ。

Mハンド

「さて、次の工程へ移ろう。」

Mハンドは次の工程に移ろうとした。次の工程とはこのキャラ達に
アイテムとしての意識を持たせることだ。だが・・・

ワルイージ

「おい！！俺らって何でアイテムなんだよ！！ワリオだってファイ
ターとして出てるんだから俺らもファイターとして出してくれたっ
て良いじゃねえかよ！！」

まだアイテムとしての意識が薄いワルイージがMハンドに『俺もフ
アイターが良い』と文句をつけた。だがこんなのいつもの事だ。大
半のキャラは作り上げたときは文句を言うもの。Mハンドは無視し
てアイテムの意識を持たせようとした。だが・・・

ナツクルジョー

「たしかにこのヒョロヒョロのおっさんの言う通りだぜ？俺達も一
つ無制限に暴りたいぜ！」

サイボーグ忍者

「俺に生きる実感をくれ！」

ジェフ

「僕も時折ネスを羨ましく思うよ……。争いは好きじゃないけどこの世界に居るからにはファイターとして戦ってみたいな。」

リセットさん

「ワシはアイテムで登場したときも言ってることやで……！」

今回は一気に沢山のキャラを作り上げたため皆が一斉に文句を言い出したのだ。

8

Mハンド

「悪いが無理だ。世界のバランスを保つためだ。悪く思わないでくれ。」

Mハンドは適当になだめ、アイテムとしての意識を持たせようとした。だが、

ワルイージ

「嫌と言ったら嫌だぜ……！こうなったら自力でファイターにのし上がってやるぜ……！」

Mハンド

「無駄なことはやめて大人しくアイテムになれ。」

ワルイージたちのわがままにマスターハンドも少タイライラしていた。そして……!

リトルマック

「問答無用だ!…こうなったら皆で逃げるぞ!…!」

フィギュア達

「オーーーーー!…!」

なんとリトルマックの一言でファイターになる為に皆が逃げ出してしまうた!…!

Mハンド

「おい!待て!…おい!…!」

マスターハンドは散り散りに逃げるキャラ達を追いかけたがすばしっこく中々つかまらない。

シャドウ

「カオスコントロール!! . . . よし!! 彼の動きが遅くな
ったな。今のうちだ!!」

シャドウのカオスコントロールがMハンドに決まり、マスターハン
ドは追い回すことも出来なくなってしまった。そしてフィギュア
達はそのまま逃げ出してしまった

Mハンド

「おのれ!! はやくつかまえて
くわくわく。」

序章 く闘争心の逃走心く（後書き）

どんどん連載していきたいです^^

コメントを下さるとありがたいです

引き続き応援よろしく願いします^^

第1章 〽時は戦国か?〽 (前書き)

ここから本格的に始まります^^

お楽しみに!!

第1章 く時は戦国か??

マリオ

「ふう、今日も中々良い戦いが出来たな。」

リンク

「あのファイア掌抵は効いたな。」

マルス

「でもリンクさんの剣技も見事ですよ。」

アイク

「やはりベテランは違うな。64からのファイターは強い。」

サムス

「そんなことないわ。新しい方は進化して出て来るのですから。」

ワリオ

「そうだぜ!!新しい奴は強いんだぜ!!てか俺様が一番強いんだぜ!!」

ネス

「この人って謙遜ってことを知らないのかな…。と言うか今日ワリ

才さん爆薬箱食べて自爆してたっけ・・・。」

ここは大乱闘スマッシュブラザーズ？のファイター達の控え室。

たった今その日の戦いがすべて終わりファイター達が控え室に戻った所だった。

ここではその日の戦いについてお互いに和気藹々（わきあいあい）と話し合っていた。だが時は夜。もう皆は眠くなる頃だった。

ヨッシー

「ねえ、もう眠いよ。明日も乱闘があるんだからもう寝ようよ。」

「

メタナイト

「それもそうだな。では寝るとしよう。」

リュカ

「おやすみなさい。」

そして彼らは翌日に備え眠りに付いた。

明日にも大変な事件が起こるとも知らずに…

……そして夜が明けた。

ルイージ

「むにゃむにゃ・・・あ、朝だ。皆さんおはようございます。」「…」

オリマー

「ふゝ。もう朝ですか。今日も頑張りましょう。」

オリマーの横にいたピクミンたちも眠そうに目を擦っている（特に紫）

デデデ

「なんぞい。まだ眠いぞい。」

スネーク

「おいおい、早起きは三文の徳だぞ?」

ワリオ

「本当か!?早起したら儲かるのか!?なら俺様は今日は23時に寝て22時に起きるぜ!!」

ファルコン

「おいおい・・・、酷すぎて言葉が出ないよ。」

朝も和気藹々としていた。

そしてそんなこんなで彼らは朝食を済ませて準備をしてマスターハンドが作り上げたスタジアムへと向かっていった。

フォックス

「あれ?マスターハンドがないぞ?」

ナナ

「本当だ〜。」

ポポ

「どこに行ったんだらう?」

デデデ

「きつとまだ寝てるぞい。」

メタナイト

「陛下とマスターハンドは違います。」

ファイター達はいつもは居るマスターハンドがないことに疑問を感じていた。しかし

ピーチ

「でも始めていいんじゃないですか? 審判ロボも転送装置も動いてるわよ?」

ルカリオ

「まあ確かにスケジュールを守るのは悪いことではない。第一試合を始めても問題は無いだろう。」

スタジアムの機械の使い方も知っているファイター達は自分達で試

合を始めることにした。

ファルコ

「そんじゃ始めっか。第一試合は

ステージ マリオサーキット

ストック 3

アイテム無し

参加ファイター

・ワリオ

・スネーク

・キャプテンファルコン

・デデデ

って所だな。」

Tリンク

「すなわち重量級戦ってことだね。」

ポケモントレーナー

「じゃあ参加するファイターは位置について。
着いたね。じゃあ大乱闘スタート!!」

ポケモントレーナーが乱闘開始のスイッチを押して乱闘が始まった。
参加しないファイターは観戦だ。

そして彼らはまだ事件が動き出すことを知る由も無い…

ワルイージ

「おい！みんな！！準備はいいか！？」

サムライ・ゴロー

「バツチりだ！！」

ロビン

「エナジーも満タンだよ!!」

ジエフ

「あ!出てきたよ!」

彼らは言わずと知れたヘルパー軍だ。

だが彼らはフィギュアに収まらずにマリオサーキットの脇道に隠れてファイターの登場を待っていた。

そしてファイター達が出てきた。

ワリオ

「いくぜえ!」

スネーク

「シヨウタイムだ。」

ファルコン

「Let's go!!」

デデデ

「やっつやるぞい!!」

自動アナウンスシステム

「3 / 2 / 1!! GO!!」

そして本格的に試合が始まった!!

ファルコン

「ファルコン・パンチ!!」(ドカ!!)

スネーク

「そこだ!!」(ドカン!!)

ワリオ

「ワリオっぺ! . . . あれ?」(ふう)

デデデ

「スーパードデデジャンプぞい!!」(ドシーン!!)

観戦者

「行けー!!そこだー!!」

乱闘も本格的に盛り上がってきた。そして遂に事件が動き出す…!!

リトルマック

「今だー！ー！行くぞー！ー！」

ヘルパー軍

「オオー！ー！ー！」

リトルマツクの声を元に隠れていたヘルパー軍が動き出した！！

サムライ・ゴロー

「オラオラオラアー！ー！ファルコンめ！ー！覚悟お！ー！」

ワルイージ

「俺達にも闘わせてくれよ！ー！喰らえ！踏みつけキック！ー！」

リトルマツク

「パンチなら負ける気がしないぜ！ー！とりゃあー！ー！」

ヘルパー軍は好き勝手に攻撃を始めた。

ファルコン

「なにに！？ゴロー！ー！なぜおまえがここにいるんだ！？」

スネーク

「アイテムは無しでは無かったのか！？」

ファイター達は居るはずの無い存在の攻撃に驚いていた。

リセットさん

「くらあー！ー！ー！ー！ワシらをアイテム扱いしとつたら許さんで！
！そなりセットと同じくらいアカンことや！ー！ワシらも動き回って
戦いたい言うことや！ー！第一にワシらはな……………」

サイボーグ忍者

「長い説教はいらん。簡単に言うと俺達もお前らの様にファイター
として戦いたいと言うことだ。」

チンクル

「だから下克上を起こして私達が戦士にのし上がるつと言っわけな
んです。」

ラブラドール・レトリバー

「ワン！ワン！」

デデデ

「そんな生意気なこと許さ……………」

ナックルジョー

「スピンキークー!!」

デデデ

「ぐほあっ!!」

デデデはヘルパー軍の暴走を止めようとしたがヘルパー軍の勢いは凄まじく、逆にナツクルジョーのキックをモロに喰らってしまった。

マリオ

「おい……、大変なことになってるぞ!!」

ファルコ

「そんな見りゃ分かるだろ!!」

マルス

「とりあえず止めないと!!」

サムス

「そうね!!みんないきましよう!!」

観戦していた者達はこの状況に取り乱していたが、マルスの冷静な発言により急遽ファイター全員がマリオサーキットへ転送された。

シャドウ

「こんなものか？」

ファイター達が転送された時、デデデがシャドウの攻撃を受け続けていた。

ソニック

「Hey!! シャドウよせ!! 話は聞こえてたがそんなの良くないぜ!!」

シャドウ

「フン。僕達はファイターになるためにやっているだけだ。」

ルカリオ

「クソ!! 分らず屋め!! ところでマスターハンドはどこだ!？」

シャドウ

「あの大きな手なら僕のカオスコントロールのお陰で今頃彼の事務所の中を分速3?で動き回ってるだろうな。」

ルイージ

「ひびくよ．．．。ひびくよよ．．．」

ワルイージ

「へ！知ったこつちやねえぜ！！ここから俺らの下克上が始まるんだよ！！」

こうして『ヘルパー軍の逆襲』事件が起きたのだった。彼らの運命
やいかに……………

第1章 く時は戦国か?? (後書き)

第1章終了!!!

応援&コメがあると嬉しいです!!

第2章 ～超特大乱闘開幕！～

リトルマック

「手加減はしないで！！」

ファルコン

「やるしかないみたいだな」

今39人のファイターと無数のアシスト軍がにらみ合っていた。

マリオ

「よし！！」

リトルマック

「みんな…、」

マリオ&リトルマック

「行くぞおお！！」

全員

「おおおおおーーーー！！！！！！」

そして！！

今まで見たことの無い70人を超える人数での超特大乱闘が始まった！！

アンドルフ

「おい！！この前に決めたフォーメーションに付いてくれ！！」

ヘルパー軍

「おおー！！」

ヘルパー軍はアンドルフの言葉にしたがってステージ右半分を占拠した。

ルイージ

「フォ、フォーメーション！？」

ワルイージ

「げへへっ！！俺達はちゃーんと作戦を考えてんだよ！！お前らはこの作戦にゃ手も足も出ねえぜ！！」

ワルイージはそう言うと自分のフォーメーション位置に付いて行っ

た．．。

そのフォーメーションとは

ステージのほぼ中央（最前列）に、ヘリリンとロビンとドクターラ
イト、（前衛部隊）

その少し後ろに、くるり&ラセンドー8、エキサイトバイク、サキ
アマミヤ、サイボーグ忍者が、（第二部隊）

更に少し後ろに、サムライ・ゴロー、バーバラ、センシャ&ホヘイ、
レイMk3、ナックルジョーが、（中間部隊）

そしてもう少し後ろの上のコースに、リン、ワルイージ、ハンマー
ブロスが、（後方部隊・上）

下のコースに、ジェフ、スタフィー、リトルマックが、（後方部隊・下）

そして最後尾に、リセットさんとシャドウとラブラドルが、（最終部隊）

更に空中に、チンクル、カット&アナ、ジュゲム、デビル、メトロイドの五体が、（空軍）

そしてコースの奥底にアンドルフ、（司令官）と言ったフォーメーションだ。

マルス
「僕達もフォーメーションを立てたいな・・・。」

アイク
「俺達はその方も戦いやすいな・・・。」

メタナイト

(本当の騎士はそういうものなのか・・・)

3人の剣士が小さく呟く。

ワリオ

「へっ！！何がローテーションだ！！所詮俺様の特攻には敵わないぜ！！！」

そんなの関係無いと思う者も居る様だ・・・。

ワリオ

「オラオラオラア！！行くぜえええ！！！」

そしてワリオはバイクに乗り、敵のフォーメーションへ突っ込んでいった。

スネーク

「おいおい、戦場でそれはタブーだろ。」

フォックス

「と言うかローテーションじゃなくてフォーメーション・・・。」

だがワリオはそんなスネークたちの心配をよそに突っ込んでいく。

アンドルフ

「ぬえ！？突っ込んできたか……では前衛部隊よ、返り撃つのだ！！」

前衛部隊

「ラジャー！！！」

アンドルフがそう言うなり彼らは動き出した。

まずはヘリリンが縦盾たてになり、ワリオが後ろまで特攻するのを防いだ。そしてワリオバイクは倒れ、ワリオはバイクから落ちてしまった。

ワリオ

「おわっ！！危ねーじゃねえか！！邪魔だぞ！！通行妨害だ！！」

ワリオは怒り散らして、叫ぶように怒鳴った。

ロビン

「知るかー！！喰らえ！！これが僕のエネルギーだ！！」

だがワリオの言葉など誰にも耳を傾けてもらえず、ワリオにロビンのエネルギーが炸裂した。

そしてワリオはバイクと共に後ろへ押し流されてしまった。

ワリオ

「お、おい！！コラ！！くらあ！！！！」

ワリオは押し流されて怒っている。

ワリオ

「おのれ！！！！フガ！！！！怒ったぞ！！！！どりゃあー！！！！」

そしてワリオの怒りが頂点に来たようだ。そしてワリオは今度はバイクに乗らずにやけくそに特攻した。

ガノンドロフ

「馬鹿か」

クッパ

「言つまでも無い事なのだ。」

ワリオ

「オラぁー！ー！ー！ゆるさねえぜ！ー！」

アンドルフ

「まだ来る様だな。ドクターライト、お前の出番だ。」

ドクターライト

「お任せ下さい！」

ドクターライトはそう言うと特攻するワリオの足元から巨大な摩天楼を出現させた。

ドガアアアアアアア！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

ワリオ

「！あぁあ！ー！」

ワリオは強烈な摩天楼の一撃で空高く吹っ飛ばされ、ソニックの横

に落っこちた。

ドシーーン！！

ソニック

「はあ。だからみんな止めとけと言ったのにな。」

ピーチ

「それにしてもフォーメーションって凄いわね。」

ロボット

「関心シテイル場合デハアリマセン。」

ワリオ

「ク、クッソ〜〜！！」

アンドルフ

「フオ、フオ、フオ！思い知ったか！！ではここから我々の攻撃を
決行するぞ！！行け！！行け！！第二部隊よ！！」

ファイター達が啞然とする中アンドルフは高笑いをしていた。

第二部隊

「ははっ！！」

そして！ヘルパー軍の反撃が始まった！！

くるり

「どりゃー！」

真っ先にくるりが突っ込んできた。そしてくるりはファイターの群れの中を縦横無尽に駆け巡る！！

ウルフ

「うお！危ねえじゃねえかこのクソガキが！！！」

オリマー

「ひゃ〜。私のピクミンが・・・」

ファイター達はくるりの勢いに押されて避けるのが精一杯の者がほとんどだった。

メタナイト

「ふむ。中々厄介だが私達も食い下がる訳には行かないな。行くぞ
！！ドリルラッシュ！！うりゃ！！」

メタナイトはそう言うなりドリルラッシュで返り討ちに行った。

ピット

「うわ。ドリル対決だ。」

リンク

「ピット君呑気な事言っていないで応戦しないと！！」

リンクは弓を構えながら言う。

ピット

「あ、うん。やあ！！」

Ｔリンク

「僕も！！」

そして3人の弓使いはそれぞれくるりに向けて矢を放った。

三つの矢と1つのドリル(?)がくるりに向かって飛んでいく・・・

くるり

「きゃ〜〜!!アブない!!」

ガキンツ!!

リンク

「決まったか!？」

リンクは『ガキンツ!!』という音に期待を膨らませていた。だが
・

サイボーグ忍者

「そんな武器では俺には勝てんぞ!」

リンクの目の前には刀を振り回すサイボーグ忍者がいた。サイボーグ忍者の前には折れた三本の矢と、ドリルラッシュの反動で少し後ろのめりなメタナイトがいた。

メタナイト

「何！？確実にラセンダーを破壊したと思ったのだがな……。」

サイボーグ忍者

「考えが甘いようだな！！所詮お前らは俺らには勝てぬ！もう一度行くぞ！！！」

くるり

「2、3！！！」

そしてサイボーグ忍者は刀を振り回し、くるりはドリルでもう一度特攻しようとした。がしかし、

ワリオ

「おいおいおい！！そんな特攻じゃあ俺様は倒せないぜ！！特攻つてのはこうやるもんだぜ！！！」

ワリオは先ほどドクターライトの攻撃を受けたのにもかかわらず、元気にバイクに跨り、サイボーグ忍者に特攻して言った。

リュカ

「ワリオさんって勢いだけなら誰にも負けないな……。」

ファルコ

「フーかさつきあんだけ喰らっという説得力がねーぜ。」

だがワリオはそんな心配など構わずに特攻していく……。

ワリオ

「おらあー！！今度は決めてやるぜええ！！！」

サイボーグ忍者

「まさにアホだな……、エキサイトバイク軍よ！返り撃ってやれ！！！」

ピコ？ピコ！？ピコ！ ブーン！！

エキサイトバイク軍団はぐんぐん加速し、ワリオに向けて特攻していった。中には跳ねる者などもいた。

因みにエキサイトバイクのライダー達はゲームウオッチ同様に善悪の区別は無いため、命令されたからやるだけと言った感じである。

ワリオ

「おわっ！こら！！バイクは一人一台までだぜ！？ズルすんじゃねえぞ！！」

ウルフ

「一人一台だろ・・・。」

そしてワリオバイクはエキサイトバイクの特攻でまた倒れてしまった。

ワリオ

「クッソー！！ちびバイク共め！！踏んづけてやる！！」

そしてワリオは先ほど同様にバイクに乗らずにバイク軍団に突っ込んでいった。

アンドルフ

「しつこいデブもいるもんだな。ならばサキ アマミヤとどめだ！」

サキ アマミヤ

「OK! Take this!!」

サキ アマミヤはワリオにガンで攻撃をした。

トトトトトトトトトトッ！

ワリオ

「ぐわああああ！！！」

そしてワリオはまた吹っ飛ばされてしまった・・・

ルカリオ

「うゝむ。ワリオを見て分かる通り並の力で戦うのは難しいな・・・」

ワリオ

「この野郎！！ルカリオ！！俺様を実験台にしやがったのかー！！」

ヨッシー

「自分からなったくせに……」

ファイター達がそれぞればやく。

だがファイター達はヘルパー軍の強さを痛感しているのは確かだ。

そしてこれからどうなるかを知るファイターやヘルパーはまだ居ないだろう・・・

次章へつづく・・・

第2章 超特大乱闘開幕！〜（後書き）

終わった〜^^

てか無理やり終わらせた^^

とりあえず次の章に期待して下さい（しすぎないでねw）

第3章 く本気の戦いく

ワルイージ

「へへっ！フォーメーションの恐ろしさが分かったか！？」

シーク

「いくら何でも酷いな・・・。」

サムス

「どうしましょう・・・。」

ファイター達は戦力的にも精神的にも徐々に追い込まれていった。

ワリオ

「くっそ〜！！俺様は不死身だぜ！！まだまだやってやらあ！！！」

しかし、まったく屈しない強い（？）心の持ち主もいた。

ワリオ

「俺様は成功するまで突っ込み続けるぜ！！行くぞー！！！」

そしてワリオはまたバイクに跨った。

ウルフ

「まあ、時間稼ぎには丁度いいぜ。」

クツパ

「でも無謀なのだ。」

ワリオ

「おいおいクツパ！！何ブツブツ言ってるんだ！！次こそは華麗にあいつらを轢き殺すんだから大人しく見てやがれ！！」

ネス

「華麗に轢き殺すって何か矛盾……。」

ワリオ

「行くぜええ！！次は決めるぜえ！！二度あることは二度あるってやつだあ！！」

そしてワリオはまた走り出した。

スネーク

「おいおい、二度あるなら次も失敗だろ。」

オリマー

「ことわざ使う意味・・・。」

だがワリオはスピードを上げて敵陣に突っ込んでいく・・・。

アンドルフ

「バカめ！」

アンドルフは口からポリゴン板を一枚吐き出しワリオにぶつけた。

バキィッ！！

ワリオ

「おわぁー！！」

ワリオはポリゴン板にぶつかりまた吹っ飛んでしまった。

そして遂にバイクも大破してしまった。

フォックス

「三度あつたな・・・。」

ワリオ

「ああああ！！俺様のバイクがああ！！クッソー！！あいつ！！」

ワリオはその場で地団太を踏んだ。

第3章 く本気の戦いく（後書き）

まだ未完ですが
いったん投稿します
すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241z/>

大乱闘スマッシュブラザーズX ~ヘルパー軍の逆襲~

2011年12月17日11時54分発行